

コーパスと辞書に見られる慣用句の「変異形」

石田 プリシラ
筑波大学人文社会系

キーワード：慣用句 形式的固定性 変異形 コーパス 慣用句辞典 日本語学習者

1. はじめに

「慣用句¹」とは複数の語から構成されている表現であり、構成語同士の結びつきが強い、という特性がある。よって、個々の語を省略したり、類義語や対義語に入れ替えたりすることは通常できない(1)。

- (1) 足を洗う／*足洗う／*足洗い, 口を割る／*口が割れる, お茶を濁す／*煎茶を濁す, 油を売る／*油を買う

ところが、慣用句の中には、構成語の結合度が比較的高いものもあれば(1)、比較的低いものもある(2~3)。

- (2) 口を出す／口出し, 心にかける／心がける(宮地 1985)

- (3) 口車に乗せる／口車に乗る, 腕が下がる／腕が落ちる, 喧嘩を売る／喧嘩を買う(森田 1994)

本稿では、(2) や (3) のような対応関係にある表現のペアを「慣用句の変異形」と呼ぶ(石田 1998)。「慣用句の変異形」とは、二つ以上の慣用表現が互いに構成語及び意味の面で部分的に重なっているもので、かつ日本語において比較的安定した表現のことである²。

個々の慣用句に「変異形」が存在するかどうかは、それぞれの慣用句の用法及び固定度に関する重要な情報となり、日本語学習者にとって特に重要と思われる。しかし、慣用句辞典においては、個々の慣用句を語彙・構造的に固定した表現として提示する傾向が強いと考えられる(Fellbaum 他 2006)。そこで本稿の目的は、コーパスに見られる慣用句の「変異形」が日本語慣用句辞典においてどのように扱われているかを明らかにすることと、従来の研究及びコーパスデータを踏まえながら、辞典・辞書における変異形のあり方を考えていくことである。

2. 慣用句の「形式的固定性」と「変化可能性」

慣用句の内的な結合度が高いことが、従来、その特性の一つとして指摘されてきた。この特性は「形式上の固定性」(村木 1991)、「安定性 (Stabilität)」(伊藤 1997)、「形式的固定性」(石田 1998) などと呼ばれている。本稿では、便宜的に「形式的固定性」と呼ぶことにする。

ところが、すべての慣用句は形式的な変化を全く示さないわけではない。宮地 (1982b, 1985)

¹ 宮地 (1982a: 238) によれば、慣用句とは「単語の二つ以上の連結体であって、その結びつきが比較的固く、全体で決まった意味を持つ言葉」のことである。本稿では、宮地の定義を採用し、宮地が慣用句とみなしている表現を対象とする。なお、慣用句の形式・統語・意味的な特性に関しては、宮地 (1982b, 1985, 1986)、森田 (1994)、石田 (1998, 2000, 2004) などを参照されたい。

² 本稿で言う「変異形」は、英語慣用句の variants (a) やドイツ語慣用句の Variante (b) にほぼ対応する概念である。詳細に関しては Moon (1998) や伊藤 (1990) を参照されたい。

(a) hit the hay / hit the sack (干し草 / 袋をたたく = 「寝る」)

(b) neues / frisches Blut zuführen (新しい / 新鮮な血を供給する = 「新進気鋭の人材を導入する」)

は自動詞形・他動詞形の言い換えや（「腹が立つ／腹を立てる」）、動詞・形容詞慣用句の格助詞の省略現象について述べている（「目が覚める／目覚める」「抜け目がない／抜け目ない」）。また、森田（1994）は、慣用句における動詞の類義語・対義語との置き換えを指摘している（「腕が下がる／腕が落ちる」「腰が強い／腰が弱い」）。さらに石田（1998）は、様々な慣用句の変異形を考察・分類した結果、「構造的な変化」にかかわるものと「語彙的な変化」にかかわるものがあると主張している。「構造的な変化」は、慣用句の構成語が付加されたり省略されたりすることにより慣用句の内部構造や文法的な機能が変化することであり、「語彙的な変化」は、慣用句の名詞・動詞・形容詞が他のものと入れ替わることをいう。

また、佐藤（2007）は慣用句辞典と国語辞典（合計5冊）の見出し語句の調査を行い、見出しの慣用句には、内容語・機能語の交替や（「上を下への大騒ぎ／大騒動」「目から鼻に／へ抜ける」）、「部分／全体」といった異形（「首を長くする／首を長くして待つ」）にかかわる「揺れ」があると指摘している。こういった「揺れ」の原因として、1) 辞書編纂者の誰もが参照できるような「標準的な慣用句辞典」が存在しないことと、2) 慣用句の見出し形を定めるための一般的な手続きがないことを理由として挙げている。しかし、見出し句の揺れが、従来指摘されてきた慣用句の「変化可能性」による現象であるかもしれない、という可能性には触れていない。

以上述べたように、慣用句の「変化可能性」や「変異形」に関する現象は、従来の研究で検討されている。ところが、従来の研究手法としては、研究者の内省や、手作業により収集された少量の用例を頼りにすることが多かった。本稿では、変異形を抽出するためにはコーパスが有力なツールであり、コーパスを利用することにより、慣用句の「変化可能性」をさらに明らかにできると考える。特に、コーパスにおける出現数は個々の変異形の安定性の指標になるので、内省や少量のデータだけではなかなか発見しにくい変異形や対応関係を明らかにできる可能性があると考え。そこで本稿では、慣用句の変異形をコーパスから抽出し、このように抽出した表現が慣用句辞典においてどのように扱われているかを検討していく。

3. コーパスに見られる慣用句の変異形

3. 1 本稿の研究対象と研究方法

まず、先行研究でよく扱われている慣用句を100個選定した。それから以下に挙げる検索ツールを用いて、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ)から変異形の候補を抽出した。

① NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB) ver. 1.00

これは、名詞や動詞などの内容語の文法的な振る舞いや共起関係を明らかにするためのレキシカルプロファイリング (lexical profiling) 型のコーパス検索ツールである。本稿で用いた ver. 1.00 には、BCCWJ モニターデータ (2009 年度版) のうち書籍・国会議事録・Yahoo!知恵袋・Yahoo!ブログといった4つのテキストタイプが含まれていた (約 62,500,000 語)。事前に選定した慣用句における内容語を検索にかけ、検索結果として表示された様々な句構造 (「X+助詞+動詞」「Y+助詞+形容詞」など) 及び共起語 (「X が立つ／X を立てる／X を割る…」「Y が (の) {強い／弱い／短い…}」)、ならびに用例を検討し、個々の慣用句の変異形の候補を抽出した。

② 「中納言」 ver. 1.2.0

これは BCCWJ の最新版 (2012 年 3 月 30 日時点で、11 種類のテキストタイプで合計約

105,000,000 語) を検索するためのオンラインコンコーダンスー (concordancer) である。NLB とは違って、検索結果はコンコーダンスラインとして表示され、句構造や共起語の分類は示されない。「中納言」を利用したのは、できるだけ大きく、かつ、豊富なテキストタイプから構成されたコーパスで、NLB から抽出した変異形の候補を検証するためである。検索方法としては、慣用句の構成語をキーとし、NLB の検索結果から得られた共起語を、前方あるいは後方共起条件 (10 語以内) として追加して検索した。できるだけ多くの用例を抽出するために、各検索クエリーを必要最小限の語彙素から作成した (Moon 1998, Fellbaum 他 2006, Philip 2008)。

BCCWJ から抽出した変異形の候補を「変異形」とみなせるかどうかを判断するために、BCCWJ における出現数が 10 件以上であることと、母語話者の容認性判断が「問題なく言える。普通に言える」となる、という二つの条件を設けた³。次に「変異形」とみなした表現を分類し、辞書の調査に向けて、次の 5 つの変異形タイプを対象を絞った (56 個の慣用句、合計 150 個の変異形)：1) 類義関係にある変異形、2) 対義関係にある変異形、3) 自動詞形・他動詞形の関係にある変異形、4) 慣用句とそれに対応する複合語、5) 内容語の付加・省略による変異形。

3. 2 変異形の抽出と記述にかかわる問題点

① 「標準形」の問題

先に述べた「変異形」や「変化可能性」は、「どちらがどちらに変化した」というような「標準形」あるいは「基本形」を前提にしていると思われるかもしれない。通時的な観点から見れば、二つ以上の変異形のうち、どちらが一次的なもので、どちらがそこから派生した二次的なものであるかを判断できるはずである (例：「口を出す」→「口出し」)。しかし、共時的な観点からみれば、二つ以上の表現が両者とも比較的よく用いられている場合や (4)、使用頻度の差があるとしても、母語話者の判断では両者ともに「標準形」と認められる場合が多い (4-5)。

(4) 腹が立つ [464] / 腹を立てる [387 件]

(5) 終止符を打つ [95 件] / ピリオドを打つ [40 件]

また、三つ以上の表現が語彙・意味の面で互いに部分的に重なっており、複雑な対応関係をなしている場合は、「標準形」を定めるのが難しい (例えば「幕を開ける / 幕を閉じる / 幕を下ろす / 幕を引く / 幕が開く / 幕が下りる / 幕が切って落とされる」)。

本稿では、部分的に重なっている二つ (以上) の表現形式は語彙体系のレベルで同等の資格を持っており、互いが互いの変異形であるとみなすことにする (石田 1998, Moon 1998, Philip 2008)。つまり変異形同士の相互関係に重点を置き、その変化の方向性は問題にしない。

② 臨時・創造的な変異形の問題

BCCWJ において、「寝耳に水」(6) と「鼻(っ柱)を折る」(7) は以下の用例が見られる。

(6) どっちかという用心深くて乗り遅れる思索家タイプだからなあ。寝耳に大雨だよ。
(青野聰『七色の逃げ水』1988)

(7) その鼻っ柱を叩き折ってやろうと、勝彦は考えたのでしょう (大倉崇裕『丑三つ時か

³ 母語話者の判定は、次の尺度を用いた：○＝「問題なく言える。普通に言える。」△＝「可能かもしれないが、普通は言わない。」×＝「言わない。言えない。」

ら夜明けまで』2005)

ところが、上の用例はそれぞれ1件しか出現しておらず、それぞれの書き手が強調(6-7)やユーモア(6)といった文体的な効果をもたらすために、臨時的な変異形を作り出したものと思われる。このような臨時・創造的な用法は、日本語や(宮地1986, 1991)英語の慣用句に関する先行研究で取り上げられている(Gläser 1998, Moon 1998, Sczcepaniak 2006, Philip 2008)。

本稿では、(6)や(7)などの臨時・創造的な変異形と、(4)や(5)などの一般に用いられている(認知度の高い)変異形を区別する。また、本稿の主眼点は辞書における慣用句の扱いという問題であるため、考察の対象を一般に用いられている変異形に限定する。

③ 慣用句の変異形なのか、異なった慣用句なのか

構成語の交替がかかわっている変異形に、どこまで含まれるのかを定めるのは難しい場合がある。例えば、(8)の慣用句同士は同じ構造を持っているし、その構成語及び意味は部分的に一致している。よって、これらは「類義関係にある変異形」と思われるかもしれない。

(8)「耳に挟む」「小耳に挟む」「耳にする」「耳に入る」

しかし、これらの表現を詳しく検討すると、「変異形」と認められるものと認められないものがある。「耳に挟む」と「小耳に挟む」は構成語及び統語的な構造、また意味も類似しており、「小耳に挟む」の「小」が「聞く」といった動作の非意図性を強調する点だけで違いがある。一方、「耳にする」と「耳に入る」は「耳」が含まれている点と、「偶然に聞く」という意味を表している点で共通性があるものの、統語構造・意味・用法上の違いが認められる(宮地1982a: 100, 194)。よって、(8)に挙げた四つの表現のうち変異形と認められるのは「耳に挟む」と「小耳に挟む」のみで、「耳にする」と「耳に入る」は、先の二つと関連した意味を表している異なった慣用句であると考えられる。このように、本稿では、慣用句の「変異形」と、慣用句と関連した意味を表している異なった慣用句を区別するために、個々の表現の意味と用法を検討する。

4. 日本語慣用句辞典に見られる「変異形」

慣用句辞典には、個々の慣用句を統語・形態・語彙的に固定した「標準形」(canonical form)として提示する傾向が強いと言われている(Fellbaum 他2006)。本稿では、日本語慣用句の変異形が慣用句辞典において、どの程度まで、どのように扱われているかを明らかにするために、一般に用いられている慣用句辞典を7冊調査した(9)。HKKJは中学・高校生向けのもので、それ以外の辞典はすべて日本語母語話者の成人を主な対象としているが、KIYとNKJは、日本語学習者も対象に含めている⁴。

(9)『慣用句の意味と用法』=KIY(1982)	245句
『標準ことわざ慣用句辞典』=HKKJ(1988)	3,500句
『日本語慣用句辞典』=NKJ(2005)	1,563句
『用例でわかる慣用句辞典』=YWKJ(2007)	3,000句
『三省堂 故事ことわざ・慣用句辞典』=SKKKJ(2010)	6,550句
『例解慣用句辞典』=RKJ(1992)	3,700句
『意味から引ける慣用句辞典』=IHKJ(1998)	1,100句

⁴ KIY/HKKJ/NKJ/YWKJ/SKKKJは五十音順の配列となっており、RKJ/IHKJは概念別分類をもとにした配列となっている。なお、KIYとNKJのみが日本語慣用句に関する先行研究の成果を参照しており、小説や新聞から収集した豊富な実例を提示している。

本稿のコーパス分析(3.1節)で抽出した150個の変異形がそれぞれの辞典に記載されているかどうか、また、記載されている場合は、どのように提示されているかを検討した。調査の結果をもとに、変異形の記載・記述方法を次の4種類に分けた。

(10) ◎=見出しとして掲載されており、記述項目がある。

○=見出しとして掲載されていないが、関連した慣用句の記述項目中には示されている。(用例、用法の解説、「類」(類義の句)や「対」(対義の句)などの特別欄)

●=見出しとして掲載されているが、記述項目はなく、他所参照の表示のみがある。

×=掲載されていない。

以下では、自動詞形・他動詞形の関係にある変異形(4.1節)、対義関係にある変異形(4.2)、及び慣用句とそれに対応する複合語(4.3)に関するコーパス分析と辞典調査の結果を報告する。

4. 1 自動詞形・他動詞形の関係にある変異形

BCCWJにおいては、自動詞形と他動詞形が併存する慣用句がたくさん見られた(11-12)。

(11a) 足並みが揃う [13件] / (11b) 足並みを揃える [32件]

(12a) 口車に乗る [14件] / (12b) 口車に乗せる [16件]

自・他の変異形は上の用例のように、形態・統語的な対応がある。自動詞形は「足並みが揃う」(11a)や「口車に乗る」(12a)のように「Nが自V」や「Nに自V」といった内部構造があり、他動詞形は「足並みを揃える」(11b)や「口車に乗せる」(12b)のように「Nを他V」や「Nに他V」の構造がある。

また、自・他の変異形は先の例のように、共通の意味を表しながらも(「多くの人々の考えや行動のそろい具合」(11a/b)、「口先でうまい言いまわしをすること」(12a/b))、一般の自動詞・他動詞の対立に準じる意味的な違いがある。それは、他動詞形は<動作主の働きかけ>を表現するのに対し(「巧みに言いくるめて相手をだます」(12b))、自動詞形は<被動者の変化>を表現する、といった違いである(「巧みに言いくるめられて、だまされる」(12a))。

ところが、次の用例のように、心理活動を表している自動詞形・他動詞形の変異形は、一般の自動詞・他動詞の意味的な対立が欠落していることが多い(宮地1982b, 石田1998)。

(13) 腹が立つ [464] / 腹を立てる [387] = 「怒る, 立腹する」

(14) 腰が抜ける [30] / 腰を抜かす [68] = 「驚きや恐怖のために立ち上がれなくなる」

「腹が立つ」と「腹を立てる」(13)は形態・統語構造の面においては自・他の対応を示しているが、意味に関しては、「腹を立てる」は<動作主の働きかけ>を示しておらず、「腹が立つ」とほぼ同じ事柄を表している。(14)の用例に関しても同様である。

自動詞形・他動詞形の変異形に関する慣用句辞典の調査の結果は、表1に示されている。表1からわかるように、自動詞形・他動詞形が併存する慣用句で、自他両形式が見出しとして辞典に掲載されている比率は約39%である。また、本稿で調査した辞典のうち、NKJ(及びKIYの「常用慣用句一覧」)は自動詞形・他動詞形の併存を最も体系的に扱っている。配列に関しては、自動詞形と他動詞形がそれぞれ別個の見出しとして掲載されていることが多いが(例えばNKJ/YWKJ/SKKJにおける「腹が立つ」と「腹を立てる」)、KIYでは、「腹が立つ/腹を立てる」のように自他両形式を一つの見出しにし、一つの項目中に両形式を記述している。

自動詞形または他動詞形、つまり片方のみが見出しとなっている場合は、見出し句の記述項目の中に、それに対応する他動詞形または自動詞形が参考情報として挙げられていることがある(12.5%)。例えば、HKJとRKJは「足並みを揃える」といった他動詞形を見出しとしてお

り、この句の記述項目の最後に「足並みが揃う」を用例（HKKJ）や類義の句（「類」、RKJ）として示している。一方、SKKKJにおいては、自動詞形の「足並みが揃う」は見出しにされており、この句の記述項目の最後に「足並みを揃える」は他動詞形（「他」）として挙げられている。

自動詞形のみ、または他動詞形のみが記載されている場合も少なくない（27%）。例えば、HKKJ/YWKJ/SKKKJ/IHKJ には「白羽の矢が立つ」といった自動詞形は見出しとして掲載されているが、「白羽の矢を立てる」は示されていない。「腹が立つ」が見出しとして掲載・記述されている場合で、「腹を立てる」は示されていないというケースもある（HKKJ/IHKJ）。また、「耳に入る」は見出しとなっているのに対し「耳に入れる」はなく（KIY/IHKJ）、「口車に乗せる」は見出しとなっているのに対し「口車に乗る」はないという場合もある（YWKJ）。なお、表1の「BCCWJ（件数）」の欄からうかがえるように、自動詞形または他動詞形の欠落は、それぞれの表現の使用頻度とは特に関係がない場合もあると思われる。

表1 日本語慣用句辞典における自動詞形・他動詞形の変異形

自動詞形／ 他動詞形	BCCWJ (件数) ⁵	KIY (辞典)	KIY (一覧) ⁶	HKKJ	NKJ	YWKJ	SKKKJ	RKJ	IHKJ
足並みが揃う／ 足並みを揃える	13	◎	◎	○	◎	×	◎	○	◎
口車に乗る／ 口車に乗せる	14* 16*	×	◎	◎	◎	×	○	○	◎
腰が抜ける／ 腰を抜かす	30 68	×	◎	◎	◎	×	◎	◎	○
白羽の矢が立つ／ 白羽の矢を立てる	26 31	×	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
歯止めがかかる／ 歯止めをかける	25 64	◎	◎	×	×	×	×	×	×
腹が立つ／ 腹を立てる	464 387	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
骨が折れる／ 骨を折る	81 32	×	◎	◎	◎	◎	◎	◎	×
耳に入る／ 耳に入れる	296 52	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
目処が立つ／ 目処を立てる	111* 11*	○	×	×	◎	◎	○	○	○
目処がつく／ 目処をつける	41 19	◎	◎	◎	◎	○	◎	◎	◎
槍玉にあがる／ 槍玉にあげる	15* 45*	×	◎	×	◎	×	×	×	×

◎＝見出しとして掲載されており、記述項目がある／○＝見出しとして掲載されていないが、関連した慣用句の記述項目中には示されている（用例、用法の解説、「類」（類義の句）や「対」（対義の句）などの特別欄）／●＝見出しとして掲載されているが、記述項目はなく、他所参照の表示のみがある／×＝掲載されていない

自動詞形または他動詞形の欠落は、（紙辞書の）紙幅の制限による場合があると思われる（宮

⁵ アスタリスク付きの数字は「中納言」の検索結果（件数）を示し、アスタリスクなしのものはNLBの検索結果を示している。

⁶ KIYは見出し句の数が少ないが（4節）、参考資料として掲載されている「常用慣用句一覧」には、約1280句が含まれている。本稿では、便宜的に「常用慣用句一覧」を調査の対象に加えた。

地 1982b: 94)。しかし、慣用句の意味と用法を正確に記述するためには、自動詞形・他動詞形の併存を体系的に示すことが必要であると思われる。これは、自動詞形あるいは他動詞形、片方の形式が全く存在しない場合が多いので（「顔から火が出る／*顔から火を出す」「目が届く／*目を届ける」「口を割る／*口が割れる」「手を抜く／*手が抜ける」）、個々の慣用句の固定性の度合を示すためにも重要な情報になる。なお、日本語学習者にとっては、自他両形式が存在するのか、片方の形式のみが存在するのかという情報は特に重要なので、自動詞形と他動詞形が併存する慣用句を両者とも見出しとし、互いに参照しやすいようにすることが望ましい。

4. 2 対義関係にある変異形

BCCWJ から抽出した慣用句の中には、互いに同じ構造を持っており、かつ構成語が部分的に一致している慣用句で、互いに反対の意味を示すものがある (15-16)。本稿では、こういった変異形を「対義関係にある変異形」と呼ぶ (石田 1998)。

(15) 気が強い [97] / 気が弱い [109], 気が短い [43] / 気が長い [16], 歯切れがいい [69] / 歯切れが悪い [39]

(16) 手を借りる [75] / 手を貸す [223], 喧嘩を売る [84*] / 喧嘩を買う [8*]⁷

(15) と (16) のように、形容詞慣用句に含まれている形容詞や動詞慣用句に含まれている動詞が対義語によって入れ替えられるもので、慣用句全体が互いに反対の意味を表す場合が多い。しかし、(17) と (18) のように、個々の表現の後項の構成語同士が対義語でなくても句全体が互いに反対の意味を示す場合や、反対の意味を示す変異形間に一対一の対応関係が認められない場合がある。

(17) 口が軽い [19] = ①「おしゃべりである」、②「秘密にすべきことを口外しがちである」

①口が重い [28] = 「口数が少ない」

②口が堅い [35] = 「秘密をむやみに口外しない性格である」

(18) 懐が温かい [14*] = 「所持金がたくさんある」

懐が寂しい [12*] / 懐が寒い [7*] = 「所持金が少ない」

また、(19) のように、複数の慣用句が語彙・統語構造・意味の面で互いに部分的に重なっており、複雑な類義・対義関係をなしている場合もある。

(19) 幕を開ける [61] / 幕を閉じる [73] / 幕を下ろす [23] / 幕を引く [13] / 幕が開く [20] / 幕が下りる [20] / 幕が切って落とされる [14*]

本稿で調査した慣用句辞典において、対義関係にある変異形が両者とも見出しとして掲載されている比率は約 45% である。特に NKJ/YWKJ/SKKKJ/RKJ の四つでは、この種の変異形が比較的好く扱われており、個々の変異形が見出しとして掲載・記述されていることが多い (例えば「手を借りる」と「手を貸す」(16) (NKJ/YWKJ/SKKKJ/RKJ), 「気が短い」と「気が長い」(15) (YWKJ/SKKKJ/RKJ))。なお、個々の記述項目の最後に「対 (句)」や「反 (対)」の欄が設けられ、見出し句に対応する慣用句とその意味の関係が明確に示されている場合があるが (相互参照)、示されていない場合も少なくない。

本稿で調査したすべての辞典において、片方の慣用句のみが見出しとなっている場合で、そ

⁷ 「喧嘩を買う」は BCCWJ での出現数が 10 件に満たないが、母語話者の判断では「問題なく言える」ということから、変異形とみなすことにする。「懐が寒い」(18) に関しても同様である。

の慣用句の記述中にそれに対応する対義表現が挙げられているケースがある (25%)。例えば、「歯切れがいい」が見出しとして掲載・記述されている場合は (NKJ/YWKJ/SKJKJ/RKJ/IHKJ)、「歯切れが悪い」がこの句の記述の最後に「対(句)」(YWKJ/RKJ)や「反(対)」(NKJ/SKJKJ/IHKJ)のものとして挙げられている。KIY ではこれとは逆に、「歯切れが悪い」の方が見出しとなっており、この句の記述の最後に「歯切れがよい」は(反対の意味を表している「類義語句」として)挙げられている。

以上述べたように、BCCWJ から抽出した対義関係にある変異形は両者とも何らの形で辞典に記載されていることが多い。しかし、片方の表現しか記載されていない場合もある(約6%)。例えば NKJ/RKJ においては、「気が強い」(15) は見出しとなっているものの、「気が弱い」は示されていない。また、SKJKJ には「喧嘩を売る」(16) はあるが、「喧嘩を買う」はない。一方、「肩身が広い」といった表現は HKJKJ 以外のすべての辞典において見出しあるいは「肩身が狭い」の対義の句として挙げられているが、「肩身が広い」は BCCWJ において4件しかなく(「肩身が狭い」は98件)、母語話者にとって「普通は言わない」と判断されやすい。よって、この表現を辞書に載せるのであれば、現代日本語における使用頻度や容認性に関する説明を加えることが望ましいと思われる。

さらに、「顔が広い/*狭い」「目が高い/*低い」「顔を売る/*買う」のように、慣用句に含まれている形容詞や動詞に対応する対義語が存在する場合でも、その入れ替えによって対義の慣用句が成立するとは限らない。よって、個々の慣用句の固定性の度合を示すためにも、対義関係にある変異形を体系的に記載・記述することが重要である。なお、慣用句辞典の利用者(特に日本語学習者)が調べやすいように、対義関係にある変異形をそれぞれ見出しとして掲載・記述し、相互参照のしくみを用いてそれらの変異形同士の対応関係を明確に示すことが望ましい。

4. 3 慣用句とそれに対応する複合語

日本語慣用句の変異形には、慣用句とそれに対応する複合語といったものがある。これらは、「名詞+格助詞+動詞」あるいは「名詞+格助詞+形容詞」といった構造を持つ慣用句と、格助詞のない複合語形式が対応するといった関係である。BCCWJ においては、動詞慣用句とそれに対応する複合名詞といった変異形が多く見られる(20)。

(20) 腰が抜ける [29] / 腰抜け [32] 手を抜く [96] / 手抜き [151]
口を出す [120] / 口出し [76] 折り紙をつける [13*] / 折り紙つき [26*]

(20) のように、動詞慣用句に対応する複合名詞は、人や属性を表すものがあれば(例:「腰抜け」)、動作そのものを表すものがある(例:「口出し」)。後者の方は(21)や(22)のように、「する」という動詞が付けられ、全体でもう一度動詞句となって用いられることも少なくない。このような表現は句全体で一つの動作を表わしているが、動作性の意味はもっぱら「口出し」や「手抜き」などの名詞の方に預けられており、「する」の方は実質的な意味を持たない⁸。

(21) すべて妻にまかせて、私は口出しをしないことにした。(中村時吉『タマゴ屋の信仰』2005)

⁸ この点で「口出し(を)する」「手抜き(を)する」などは「連絡する」「考慮する」「誘いをかける」など、日本語に多く見られる「機能動詞結合」(村木 1991)との共通性が認められる。

(22) 意外とこの段階で手抜きをしている業者が多いように感じられます。(松岡浩正監修・中野博著 『エコハウスに住みたい』2003)

先の「動詞慣用句／複合名詞」といった関係にある変異形のほかに、「動詞慣用句／複合動詞」や (23), 「形容詞慣用句／複合形容詞」といった関係にあるものもある (24)。

(23) 目くじらを立てる [27] / 目くじら立てる [14]

手ぐすねを引く [10*] / 手ぐすね引く [19*]

(24) 歯切れがいい [55] / 歯切れいい [15]⁹

本稿で調査した慣用句辞典においては、慣用句とそれに対応する複合語が両者とも挙げられている比率は20%である。そのうち、慣用句に対応する複合語が、見出しの慣用句の記述中に用法の解説や用例として挙げられていることが多い(17.5%)。例えば、「口出しをする」は「口を出す」の意味解説(HKKJ/IHKJ)や言い換え(SKKKJ)として示されており、「手抜きする」は「手を抜く」の類義句(「類」)として挙げられている(IHKJ)。また、KIYとNKJにおいては、「目くじら立てる」といった複合動詞は「目くじらを立てる」の文法解説で取り上げられており(KIY), 用例も提示されている(KIY/NKJ)。

見出しとして掲載されている複合語は、「手ぐすね引く」といった複合動詞と(YWKJ/SKKKJ/RKJ), 「折り紙つき」といった複合名詞のみである(HKKJ/KIYの「常用慣用句一覧」)。先の(20)と(23)に見られるように、これらの複合語のBCCWJにおける出現数は、「手ぐすねを引く」と「折り紙をつける」といったそれぞれに対応する慣用句の出現数の約2倍である。よって、これらの複合語が見出しとなっているのは、使用頻度が比較的高いことに関連していると考えられる。しかし、これとは逆に、「腹黒い」[43*]という複合形容詞は「腹が黒い」[4*]という形容詞句よりも出現数が圧倒的に多いものの、本稿で調査したすべての辞典には、「腹が黒い」のみが見出しとして掲載されている。「腹黒い」は「腹が黒い」の意味解説(YWKJ)や同義語句(「同」, HKKJ)として挙げられているだけである。

(20-24)などの複合語が載らないことが多いのは、慣用句辞典は本来「句」を掲載・記述すべきものであり、「語」を扱うものではない、といった考え方を反映していると考えられる。しかし、複合語は慣用句と同様に複数の語から構成されている点でこの二つは共通性があり、「複合語」を「慣用句」の下位カテゴリー(白石1977)や隣接するカテゴリー(宮地1985)として位置付けている研究がある。また、複合語形式を持たない慣用句がたくさんあり(「頭にくる」「お茶を濁す」「顔が広い」), これらは(20-24)に挙げたものと比べれば形式的固定性の度合が比較的高い。したがって、個々の慣用句の用法の幅、及び固定性の度合を正確に表すためにも、慣用句に対応する複合語を慣用句辞典に示すことが望ましい¹⁰。

⁹ 「歯切れがいい」は「歯切れのいい(よい)日本語」のように連体修飾語として用いられる時、「が」が「の」に入れ替えられることが多い。また、「歯切れいい」といった複合語形容詞は、「歯切れよく返事する」のように、副詞句として用いられることが多い。

¹⁰ *Collins Cobuild Dictionary of English Idioms* (第二版, HarperCollins 2003) といった、英語学習者向けの慣用句辞典では、動詞慣用句に対応する複合名詞をその慣用句の記述項目中に掲載・記述している。例えば blow the whistle (ホイッスルを吹く「密告する, ばらす」) の項目中に whistleblowing (「(内部) 告発」) と whistleblower (「(内部) 告発者」) が挙げられており, split hairs (髪の毛を半分に分ける「細かいことにこだわる」) の項目中に hairsplitting がある(「細かいことにこだわること」)。

5. まとめと今後の課題

本稿では、BCCWJ から抽出した慣用句の変異形と、慣用句辞典に掲載・記述されている変異形を比較した結果、対義関係にある変異形は比較的良好に扱われているのに対し（約7割）、自動詞形・他動詞形の変異形（約5割）や慣用句とそれに対応する複合語（約2割）は体系的に扱われていないことがわかった。個々の辞典を見ると、NKJ と SKKKJ は慣用句の変異形を見出しあるいは参考情報として示していることが比較的多く、NKJ と KIY は用例や用法に関する解説により変異形の一部に関する豊富な情報を提供している。しかし、上記の辞典でさえ、慣用句の変異形を体系的・網羅的に扱っているとは言いがたく、個々の変異間の構造・意味的な関係を明確に示しているとも言いがたい。

本稿の結果から、慣用句に関する先行研究の成果、コーパス分析の結果、慣用句辞典の編纂の三つを密接につなげていくことが必要であると考えられる。辞書の重要な機能の一つは、ことばの用法を提示することである。よって、慣用句辞典において、個々の慣用句の変化可能性に関する正確な情報を体系的に示すことが望ましい。慣用句の中には使用頻度の比較的低いものが多いので、その一つ一つを正確に記述するためには、コーパスを大いに活用すべきである (Moon 1998, Fellbaum 他 2006, Ishida 2011)。今後は、本稿で扱わなかった変異形のタイプを (3.1), コーパスを用いて詳しく検討することが必要である。また、辞書における変異形の提示・記述方法や相互参照などの実践的な問題を改善するために、慣用句辞典の利用者を対象とした研究が必要と思われる。日本語学習者向けの慣用句辞典の開発が特に望ましい。

参考文献

- 石田プリシラ (1998) 「慣用句の変異形について—形式的固定性をめぐって—」『筑波応用言語学研究』 vol. 5, 43-56.
- 石田プリシラ (2000) 「動詞慣用句に対する統語的操作の階層関係」『日本語科学』 vol. 7, 24-43.
- 石田プリシラ (2004) 「動詞慣用句の意味的固定性を計る方法—統語的操作を手段として—」『国語学』 vol. 55(4), 42-56.
- 伊藤眞 (1990) 「慣用句とその Variation」『福岡大学人文論叢』 vol. 22(2), 331-348.
- 伊藤眞 (1997) 「第7章 言語の具象性・比喩性・受動性—日・独慣用句をめぐって—」筑波大学現代言語学研究会 (編) 『ヴォイスに関する比較言語学的研究』三修社, 249-297.
- 佐藤理史 (2007) 「基本慣用句五種対照表の作成」『情報処理学会 研究報告』 vol. 178(1), 1-6.
<http://kotoba.nuee.nagoya-u.ac.jp/jc2/download/kanyo/2007-03-sigl-178-1.pdf>
- 白石大二編 (1977) 「解説 国語慣用句とその研究のもたらすもの」『国語慣用句大辞典』東京堂出版, 525-593.
- 宮地裕 (1982a) 「慣用句解説」宮地裕編『慣用句の意味と用法』明治書院, 237-265.
- 宮地裕 (1982b) 「動詞慣用句」『日本語教育』 vol. 47(6), 91-102.
- 宮地裕 (1985) 「慣用句の周辺—連語・ことわざ・複合語—」『日本語学』1月号, 62-75.
- 宮地裕 (1986) 「日本語慣用句考」『日本語・日本文化研究論集』 vol. 3, 1-25. 大阪大学文学部
- 宮地裕 (1991) 「慣用句の意味」『「ことば」シリーズ 34 言葉の意味』文化庁, 65-76.
- 村木新次郎 (1991) 『日本語動詞の諸相』ひつじ書房
- 森田良行 (1994) 『動詞の意味論的文法研究』明治書院
- Fellbaum, C., A. Geyken, A. Herold, F. Koerner, and G. Neumann. (2006). Corpus-based studies of

- German idioms and light verbs. *International Journal of Lexicography*, vol. 19(4), 349-360.
- Gläser, R. (1998). The stylistic potential of phraseological units in the light of genre analysis. In A.P. Cowie (ed.). *Phraseology: Theory, Analysis, and Applications*. Oxford: Oxford University Press, 125-143.
- Ishida, P. (2011). Corpus data and the treatment of idioms in Japanese monolingual idiom dictionaries. In J. Szerszunowicz et al. (eds.). *International Dialogue on Phraseology* (Vol. 1). Bialystok: University of Bialystok, 101-127.
- Moon, R. (1998). *Fixed Expressions and Idioms: A Corpus-based Approach*. Oxford: Clarendon Press.
- Philip, G. (2008). Reassessing the canon: Fixed phrases in general reference corpora. In S. Granger and F. Meunier (eds.). *Phraseology: An Interdisciplinary Perspective*. Amsterdam: John Benjamins, 95-108.
- Szczepaniak, R. (2006). *The Role of Dictionary Use in the Comprehension of Idiom Variants*. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.

慣用句辞典

- 『意味から引ける慣用句辞典』（日本実業出版社 1998，丹野 顯編）＝IHKJ
- 『慣用句の意味と用法』（明治書院 1982，宮地裕編）＝KIY
- 『三省堂 故事ことわざ・慣用句辞典』第二版（三省堂編修所編 2010）＝SKKKJ
- 『日本語慣用句辞典』（東京堂出版 2005，米川明彦・大谷伊都子編）＝NKJ
- 『標準ことわざ慣用句辞典』（旺文社 1988，雨海博洋監修）＝HKKJ
- 『例解慣用句辞典』（創拓社出版 1992，井上宗雄監修）＝RKJ
- 『用例でわかる慣用句辞典』（学習研究社 2007，学研辞典編集部）＝YWKJ

データ

本稿は、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」を利用し、検索ツールとしては「中納言」(<https://chunagon.ninjal.ac.jp/login>) 及び国立国語研究所と Lago 言語研究所が開発した NINJAL-LWP for BCCWJ を利用した (<http://nlb.ninjal.ac.jp/>)。